

広 沖縄大学 報

発行

沖縄大学経営企画室

〒902-8521 沖縄県那覇市字国場555

☎ 098(832) 2910

http://www.okinawa-u.ac.jp



第61回全日本大学空手道選手権大会 (2017年11月19日 日本武道館)

Contents

- 02 2018年年頭挨拶
- 03 空手道部、日本武道館へ
- 04 硬式野球部 南部九州ブロック大会優勝
- 05 サッカー部優勝
- 06 男子バスケットボール部優勝
- 07 「ハイサイ！来なさい！遊びな祭！」／学P沖縄リーグ2017
- 08 2017年度沖大祭
- 10 研究のひろば（村上敬進）／わがゼミナール（伊藤志志）
- 11 リレーエッセイ（金城慎介）／外国語ちゃんぶるーフェスタ
- 12 南城型観光スタイルを提案（法経学科）
- 13 共につくる授業を学ぶ（こども文化学科）
- 14 地域交流プロジェクト／関東学院大学と交流協定
- 15 保護者懇談会／創立60周年記念事業寄附金報告
- 16 教員採用試験結果、健康栄養学部管理栄養学科を新設

学長コラム ⑩

園児たちの雨二モマケズ

仲地 博

保育園児が、宮沢賢治の「雨二モマケズ」を見事に暗誦した。英才教育を受けた特定の一人ではない。クジラ組さん（年長組）が、声を揃えてである。それだけではない。谷川俊太郎の「朝のリレー」という詩も一緒だ。「遊びせんとや生まれけん」（遊ぶために生まれてきたのであろうか）、という年頃の子ども達、しかもその子達にとってはほとんど意味のわからないお経のような詩である。

保育士さんの苦労は想像に難くないが、子ども達にこんなことを強いて意味があるのか、という声も聞かえてきそうである。こんな素晴らしい教育をしているという、親向けの点数稼ぎだ、という意見もありそうだ。子ども達のパフォーマンスを聞いて（いや見てか）、私はこんなことができるのかと、まずびっくりした。そして思った。子どもの可能性は大変大きい、保育園はそのことを親に知って欲しいのではないか。「お父さん、お母さんはできますか、あなたの子ども、そう普通の5歳児ができるのです」と。

思い出したことがある。ごく平凡な学生であったが、法科大学院（弁護士や裁判官になるための大学院）を受験するという。頼まれて推薦状を書いた。成績優秀とはとても書けなかったので、弁護士になりたい意欲は明確であることを強調した。彼は法学の科目試験のない法科大学院に合格した。推薦状がよかったのだと私は密かに満足した。しかし、大学院は合格しても司法試験はとても無理だろう、と私は内心思っていた。が、一年浪人したものの見事に合格した（早い合格である）。私は自分の目を恥じた。そして思った。

園児たちのそして小学生から大学生まで、その可能性をまず教師が信じなければならぬ。彼ら彼女らは、まだ芽吹いていなくても才能の種を持っているのだと。

2018年 年頭挨拶



理事長 長濱 正弘

明けましておめでとうございます。
皆様方には希望に満ちた2018年(戊戌)の新春をお迎えのことと、心よりお慶び

申し上げます。明けましておめでたいことと、心よりお慶び申し上げます。皆様方には希望に満ちた2018年(戊戌)の新春をお迎えのことと、心よりお慶び申し上げます。

申し上げます。昨年中は引き続き沖繩大学に御支援、御協力を賜り厚く御礼申し上げます。

事業を推進しております。学生食堂は運営事業者の選定を終え、施設的设计段階にあり、いよいよ2月には着工し、6月にオープンを予定しております。

アネックス共創館は、4階のうち1、2階及びグラウンドの整備を完了し、次年度に3、4階の整備を行う予定で準備を進めております。

歴史資料コーナーは展示内容を検討中で、創立記念日までは完了してお披露目できるよう進めてまいります。

この記念事業に取り組むに当たり、ご寄附の募集も推進してまいりました。この間、多くの

方々の御協力により目標500万円の約26.1%のご寄附を賜りました。引き続き目標に向け活動してまいりますので皆様方の御協力よろしくお願ひ申し上げます。

60周年の還暦を契機として、沖繩大学創立者・嘉数昇先生の思い「教育の機会均等」、「地域社会の発展向上に貢献できる人材育成」、更に50周年に制定された新たな理念「地域共創・未来共創の大学へ」の原点に立ち戻り役員一丸となつて行動してまいります。

来年度2019年4月には、県内で以前から切望されておりました管理栄養士を養成する

新たな学部「健康栄養学部(仮称)」の設置を構想中で、所轄官庁であります文部科学省及び厚生労働省に対し近日中に設置申請を行う運びになっております。

新学部の設置を沖繩大学の更なる発展の契機ととらえ、教育・研究の向上により尽力し、地域社会の要請する人材の輩出により沖繩の自立的発展に貢献してまいります。併せて卒業生が誇れる母校づくりに邁進していく所存でございます。

本年が学生はじめ関係者の皆様にとりまして、実りある年になりますよう心から祈念申し上げます。年頭の挨拶といたします。



学 長 仲地 博

新年おめでとうございます。希望に満ちた新年を迎えることができたことを、皆さまとともに慶びたいと思いま

ました。地域共創の拠点です。その後背地には小さいながら、人工芝を張った機能的なグラウンドを整備しました。部活や体育の授業、かけっこ教室など地域

す。沖繩大学は順調に発展の道を歩んでいます。

2017年(昨年)、大学から徒歩7分程度のところに、沖繩大学アネックス共創館をオープンし

ました。地域共創の拠点です。その後背地には小さいながら、人工芝を張った機能的なグラウンドを整備しました。部活や体育の授業、かけっこ教室など地域

の子どもたちにも活用されています。教員採用試験は、現役で初の二けた合格(14名)を達成し、過卒生を含めると40名近い合格者です。入学した後、学生の力を伸ばす大学として高校での評価も日々高まっています。

2018年(今年)6月には、創立60周年を祝います。県内では、二番目に古い歴史を刻んだ老舗の大学となりました。60周年を記念した事業は、学生の修学環境の整備を第一とし、待望の学食を設置します。必要な資金は、後援会、同窓会、企業や沖繩大学を応援して下さいさる方た

ちから多大なご芳志が寄せられています。

2019年(来年度)4月には、新しい学部「健康栄養学部(仮称)」開設を計画しています。管理栄養士(受験資格)と栄養教諭の資格が取れる県内唯一の学部です。これにより沖繩大学は、理系を備えた文理総合大学として新しいステージに立ちます。

学生も元気で、空手道部、硬式野球部、サッカー部、男子バスケット部の活躍、沖大祭・オープンキャンパス等での学生の活躍にも目覚ましいものがあります。沖繩大学は、教育でも地域貢献でも研究でも、

小さくともキラリと光る大学であると自負しております。

18歳人口の減少、青年の大都市の志向など地方の小規模私立大学を取り巻く状況は極めて厳しいものがあります。その中で、新年は創立60周年という節目の年であり、さらに100周年に向けて着実な一歩となる年となるよう全力を尽くします。

学生、教職員、同窓会、後援会(ご父母)そして沖繩大学が立地する那覇市並びに沖繩県などすべての関係者のご支援とご参加をお願いいたしまして、年頭のご挨拶といたします。

沖大空手道部、日本武道館へ

第61回全日本大学空手道選手権大会へ出場



第61回全日本大学空手道選手権大会開会式 (2017年11月19日 日本武道館)



団体組手：右は久保田光平 (法経学科3年 / 前原高校卒)



賀数淳総監督、下地英作コーチと反省会



団体形：左から高良渉 (福祉文化学科1年 / 浦添高校卒)、又吉佑紀 (福祉文化学科4年 / 首里高校卒)、成海明慧雅 (福祉文化学科3年 / 普天間高校卒)

「第66回全九州大学空手道選手権大会」が2017年10月22日、西南学院大学で開催された。沖縄大学空手道部は男子団体形で優勝、男子団体組手は5位に輝き、全国大会「第61回全日本大学空手道選手権大会」への切符を手にした。

一月後の同大会に向けて、部員たちは技術面と筋力アップのトレーニングに力を入れてきた。

11月19日、日本武道館で開催された全国大会へ団体形・団体組手ともに九州代表として出場した沖縄大学空手道部は、団体形がベスト7、団体組手は国際武道大学との初戦で苦戦し勝利には届かなかった。

全国大会を振り返り、団体形の又吉佑紀主将は「3人がしっかりと揃っていなかったところが少し目立ったが、審判を引き込むくらいの迫力が欠けてしまった」と悔しさを滲ませた。団体組手の久保田光平副主将は「1回戦から決勝戦のように全力で挑んだ。前半はいい試合をしたが自分たちが1年生をしっかりと引つ張り切れなかった」と振り返り、「技術、体力、メンタルをもっと向上させ、全国大会でリベンジしたい」と抱負を語った。

2018年も全日本大学空手道選手権大会の舞台に立てよう、全九州大会で団体形2連覇、団体組手ベスト4を目標に掲げる部員たちである。

(経営企画室 後藤)

沖大硬式野球部 南部九州ブロック大会優勝!

第98回九州地区大学野球選手権大会南部九州ブロック大会が10月9日から本県(北谷公園野球場ほか)で開催され、沖縄地区第1代表で出場した本学硬式野球部が、決勝戦で東海大学九州キャンパスを破り、2季ぶり5回目の優勝を飾りました。続いて全国大会(明治神宮大会)出場をかけ、10月21日

に福岡県で開催された第24回九州大学野球選手権大会予選トーナメント戦に九州地区大学野球連盟第2代表として挑みましたが、日本経済大学に敗退し、念願の全国大会出場は果たせませんでした。しかし、秋季大会は今回で3年連続の優勝となり、硬式野球部全国大会出場への期待は益々高まっています。



今大会は、南部九州地区の秋3連覇がかかった大会でもあり、主将としては続けて勝つことの難しさを抱えながらプレッシャーのかかった大会でもありました。それを撥ね除けるために一体感や団結力のあるチームを目指して、練習においてもチーム内での競争で切磋琢磨しながら、メンバー同士が良い関係を築くことができました。その結果優勝できたことを、今後の自信にしていきたいと思えます。また、地元開催で多くの方から声援をいただきました。次回も優勝できるように頑張りますので、応援よろしくお願いたします。

主将 山城 宏介

福祉文化学科健康スポーツ福祉専攻
3年次(知念高校卒)



エース 山城 修人

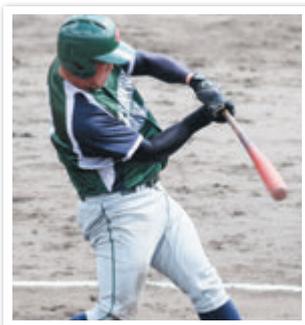
福祉文化学科健康スポーツ福祉専攻
4年次(眞志川商業高校卒)



東海大学九州キャンパスとの決勝戦は、勝てば3連覇、負ければ学生野球引退ということ、チームにとっても私自身にとっても大きな意味を持つ試合でした。この1年間は不調続きで、自分自身のピッチングを取り戻せずにいましたが、エースとしてどうしてもこの試合は勝たなければいけないという強い気持ちで決勝戦に臨みました。結果、2-0と完封勝利で南部九州地区3連覇を達成する事ができました。今まで信じて起用してくれた首脳陣、支えてくれたチームメイト、そして応援してくれた皆様のおかげです。ありがとうございました。

今大会は、沖縄開催、主力4年生の最後の大会でもあり、新チームスタートの6月から、優勝だけを目指して取り組んできました。最終的には、福岡六大学や九州六大学との決戦に敗れ全国大会出場は果たせませんでした。連日の試合で保護者、大学関係者など多くの方々が球場にお越しください、ご声援をいただきました。選手の熱い気持ちや頑張り、そして優勝という形で沖大野球をお見せすることができたことは大変感慨深いものがありました。多大なご支援に対し、チームを代表して厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。今後ともご支援の程宜しくお願ひ申し上げます。

(監督) 大城貴之





沖大サッカー部
優勝！
第32回九州各県大学サッカーリーグ



「あなたがグラウンドで喜んでいる姿が見える。」2016年12月、私が糸満市在住のユタ（沖縄独特の占術師）から伝えられた言葉である。

本学サッカー部は、5年前に九州大学サッカーリーグ2部から降格し、その後、九州リーグ2部昇格を目指して活動を続けてきたが、毎年12月に九州各地で開催される各県リーグ決勝大会では、良い成績が上げられず、監督・コーチ・学生ともに悔し涙ばかり流していた。個性ある学生をまとめることが出来ず、個々の能力を上手く発揮させられない監督としての力不足を痛感し退任を考えた事もあったが、早朝からアネックスグラウンドで練習に取り組む学生の努力が実を結び、第32回九州各県大学サッカーリーグ決勝大会（2017年12月）で、本学サッカー部が18年ぶり3度目の優勝を果たし、6年ぶりの九州大学サッカーリーグ2部昇格が決定した。学生が喜んでる姿はとても感動的であり、チーム全体で喜びを分かちあった瞬間は、1年前にユタから伝えられた言葉どおりのものだった。

試合会場で応援していただいた教職員の皆さま、本学サッカー部を支えていただいた関係者の皆さま、本当にありがとうございました。

（監督 備瀬 知貴）

沖大男子バスケットボール部 優勝

第20回 沖縄県大学バスケットボールリーグ



2017年12月9日・10日の2日間、沖縄国際大学にて開催されました「第20回沖縄県大学バスケットボールリーグ」において、本学男子バスケットボール部が4年ぶり2回目の優勝を果たすことが出来ました。

今大会に臨んだ部員構成は1・2年生と若いチー

ムでしたが、キャプテンの森田幸之介(法経学科2年次)を中心に、普段の練習から積極的に声を出しチーム一丸で戦う姿勢は、新たな沖縄大学男子バスケットボール部をかたちづくるものではないかと思えます。大会山場の名桜大学との試合においても、試合終盤に点を追いかける展開が続く中、試合に出場していないベンチメンバーの「声」が出場している選手への大きな後押しとなり、見事逆転勝利を収めることができました。練習の成果が実った瞬間であり、チームとして一つになった瞬間でもあったと思います。

今大会、応援を頂きました皆様、また、日頃より本部活動を支えてくれる保護者、大学関係者の皆様、この度は誠にありがとうございました。若いチームではありますが、上地幸市部長を先頭として、全九州リーグでの2部昇格や各種県内大会での上位進出等、常に高い目標を掲げ、チーム一丸邁進して参りたいと思えますので、今後とも、ご支援・ご声援の程、宜しくお願ひ申し上げます。

(監督 新垣真一郎)



現在の子どもたちの1日あたりの外遊びの時間は、20年前の「3時間」から「14分」に減少していると言われている。その背景には、「3間(時間・空間・仲間)の崩壊」が一因と指摘されており、運動不足による体力低下やゲームのやりすぎによる視力の低下、コミュニケーション能力の低下などにつながっていると考えられている。

そのような中、「国場児童館で子どもたちに遊びや運動を教えてくれないですか?」と、那覇市中央公民館の照屋さんの一言がきっかけでこの企画がスタートした。

学生たちは、「児童館に来てゲームをしている子どもたちに運動や遊びを紹介して、自分たちで遊べるためにはどうしたら良いか」という問いの解決に向け、「企画名は?」、「遊び・運動の内容は?」、「人を集めるならチラシも作ろう」など意見を出し合いながら、「ハイサイ!来なさい!遊ばな祭!」を作り上げた。もちろん、このネーミングも学生たちが考えた。

そして、最初の「ハイサイ!来なさい!遊ばな祭!」が2017年7月12日にスタートし、地域のお兄ちゃん、お姉ちゃんと遊びや運動を通して、20名〜30名の子どもたちが交流を深めている。遊び・運動の内容は、「ぼっちゃ」や「ドラゴンボール」、「片づけポウリング」、「風船パタパタゲーム」など学生たちが考えたものから、昔遊びなど多岐にわたっている。そのため、多くの子どもたちは初めて出会う遊びに興味をそそられ、毎回、汗だくになりながら遊び、中には帰り際に遊び道具をもらって帰るとする子もいた。

「3間の崩壊」によって「仲間

地域の子ともと遊ぶ!!
「ハイサイ!来なさい!遊ばな祭!」
福祉文化学科 健康スポーツ福祉専攻3年次(嘉数ゼミ)



右後列の沖大チームメンバー(法経学科)
リーダー: 富間かなえ(2年)、副リーダー: 鹿川裕生(1年)、宜保裕優(2年)
新垣良友(1年)、新井樹(1年)、伊保裕太(1年)、稲福祝麻(1年)、豊里凌矢(1年)

学P
沖縄リーグ2017
販売金額部門
1位

と遊ぶ場所がなく、時間のない」子どもたちに、スポーツを学ぶ学生がどのような関わりが持てるのか。今回の企画は、地域に根差し、地域と共にある沖縄大学でスポーツを学ぶ学生が地域に入り、遊び・スポーツを通して地域の課題解決に、地域と連携して取り組む良い事例と言える。

沖縄県内のファミリーマートで販売する商品の「開発から販売促進」までを体験する実践型のインターシッピング「学P沖縄リーグ」が今年も開催され、県内7大学の学生が参加しました。

2017年度沖大チームは、メンバー同士で話し合い、試行錯誤を重ね「牛(ぎゅー)と豚と鶏(トリ)プル丼」を開発しました。今回の学P全体の開発テーマが「沖縄元気生活応援団」ということで、沖縄大学は「ワンコインで3種類の肉が食べられるコンビニ弁当をコンセプトに、今まで市場にありそうで無かった商品の販売を目指し、開発に取り組みました。

商品の具材や味付け、金額はもちろんのこと、その他に商品の色合いや容器、持った時の重さ、店舗での商品売り場の位置、販促ラベルのデザインや付ける位置等、細部にまでこだわり、開発・販売活動に取り組みました。結果的に、

男性ターゲットの商品コンセプトでしたが、男性だけでなく女性の購入もあり、ボリュームと見た目、且つ栄養にも配慮した設計が高い評価を受けました。

販売期間は10月10日〜23日の約2週間、県内230店舗あるファミリーマートで販売されました。各大学5回までの店舗販売が許可され、沖大チームは学内販売1回と店舗販売2回を行い、朝10時〜夜8時まで店舗に立ち自ら商品を販売する経験もしました。結果は、ベスト学P賞を取ることができませんでした。販売金額部門では1位を取ることができ、また前年先輩方が記録した販売金額を上回ることができました。開発から販売促進までを体験して、発注分を1日で売り切らないといけないというプレッシャーやメンバー不足、お金の管理や販売場所の確保など全て学生主動で動くことの大変さや、学内販売1日で220個の弁当を売り切ることの難しさを実感することができました。今回、販売金額部門で1位を取り、前年の記録を上回ることができたのは、沖縄大学の先生方・学生・職員の皆さんに購入していただき、また、弁当販売を手伝ってくれた方がいたおかげです。ご協力いただきありがとうございます。

(法経学科2年 宜保裕優)



販売価格 / 498円(税込み)
商品名 / 牛と豚と鶏プル丼
インターン期間 / 約5ヶ月
結果 / 金額部門 1位 (865万 1,772円)
※下位大学平均売上 492万円

2017年、58回目を迎える沖大祭。

今回は「沖大祭に来てくれた人、沖大祭に関わる人たちが、沖縄大学で楽しいひとときをすごせるように」という希望を、2017年度のテーマ「歓言愉色(かんげんゆしよく)〜Let's enjoy 沖大祭〜」に託して実施しました。

準備の段階ではいろいろなトラブルも起こり、不安を抱えながらも実行委員会を始め沖大生が、がむしゃらに邁進し創りあげた沖大祭でした。今回は2日間で2000名あまりの地域の方が来場下さり、学内の至る所で、来場者や沖大生の楽しそうな表情が見られました。





「歓言愉色」Let's enjoy 沖大祭」のように

第58回沖大祭実行委員長

福祉文化学科2年次 比嘉 咲綾

(南風原高校卒)

2017年11月4日(土)、5日(日)に沖大祭が行われました。前年から引き続き実行委員をやってきて、今回は実行委員長を務めました。自ら手を挙げたものの「実行委員長」というだけで、すごくプレッシャーがありました。

実行委員長として携わった沖大祭で一番大変だったことは、一つひとつの班の仕事を把握することでした。実行委員のどの班がどの仕事を担当するのか、曖昧な点の整理や細かい業務が把握できていなくて、メンバーに大変な思いをさせる場面がありました。その時に支えてくれたのは、副委員長の二人や班のリーダー、職員のみなさんでした。支えてくれたみんなのおかげで、戸惑いながらも、仕事を進めることができました。

一番楽しかったことは、前年からやっているSNSでのカウントダウン企画です。前回は見ている側でしたが、今回はカウントダウン動画のMCとして出ることができました。沖大生に取材を行って動画等を撮影、SNSに投稿し、沖大祭の告知を行いました。普段は関わることのない人とも、カウントダウン企画を

通して知り合うことができました。また、実行委員長を務めてみて、理事長や学長、後援会や同窓会の会長さんなど、沖繩大学を支えてくれている方々ともお会いすることができ、沖繩大学が地域と共に歩んでいる大学であることを実感することができました。

今回の沖大祭を無事に大成功に終わらせることができたのは、実行委員をはじめ、沖大生、教職員、地域の方々など、たくさんの方の協力があったからこそだと思います。2017年度の沖大祭テーマである「歓言愉色」Let's enjoy 沖大祭」のように、来場者の皆様に喜びや、楽しさを味わってもらえるような沖大祭になったと思います。

そして、当日は実行委員自身も運営の傍ら、ステージイベントなどを楽しむことができ、いい思い出になりました。ありがとうございました。



県内で多くの学生が被害に遭った、いわゆる多義貸し問題は、金融リテラシーが低いため非合理的側面（インフォーマルな友人関係が意思決定に影響を及ぼしてしまつた典型的な問題である。日銀の金融広報中央委員会の調査によると沖縄県の金融リテラシーは、47都道府県で最下位である。本学では貧困研究を重要課題としているが、貧困の問題としてしばしば議論される多重債務問題以外にも、飲酒や喫煙の問題、そして金融リテラシーの低さも、貧困と密接にかかわっており、これらはすべて同根の問題である。

人間の非合理的側面からこれらの諸問題にアプローチする行動経済学という分野があり、金融及び金融教育の諸問題にも適用され実践もされている。例えば、イギリスの年金加入問題は、ノーベル経済学賞を今年度受賞したりチャード・セイラーの理論を採用している。今までは、税金の控除制度と金融教育を通じて年金加入のメリットを伝え、年金加入率を引き上げようとしてきたが、加入率

研究のひろば

県内大学生への金融教育、 飲酒・喫煙問題



経済学 環境論
（金融論、景気循環論）
村上 敬進

は上昇しなかった。そこで、加入することを選択するのではなく、（初期設定で加入の状態として）加入しないことを選択できるように年金制度改革を行ったところ、加入率が大幅に上昇したのである。

このような経済学の近年の傾向と県内学生のリテラシー上の問題から、現在は県内大学生の金融教育に関心がある。金融の分野では、プロビットモデルと呼ばれる手法によって、年金加入問題、金融機関や金融資産の選択問題を推計する研究が多いが、階層分析法やコンジョイント分析など、人々の嗜好を数値化できる他の方法も同時に採用することで、人間の非合理的側面を抽出し、金融リテラシーの向上について処方箋を得ようと研究を進めている。特に、階層分析は人間の意思決定過程を明らかにでき、その結果、どのような選択肢を選んだかを数値化できるため有益である。飲酒や喫煙の問題も、上記の研究手法で分析可能なため、金融だけに限定しないで、貧困研究としてこれらの諸問題に対して多面的にアプローチすることが沖縄県での研究では重要であると考えている。

わがゼミナール

異文化に触れて人は成長する

国際コミュニケーション学科教員（英語学）
伊藤 丈志



ないことを自分の力で解明し、それをみんなと議論しながら洗練させていく作業こそが、ゼミで学べる最も重要なことでしょう。「もしかしたら間違っているかもしれない」という不安の中、根拠を積み重ねて、論を展開していく力は大学でしか習得できません。

2つめの特徴は、3年生と4年生が合同で、週2コマやるというところです。これにより、3年生は後輩としての振る舞い方、4年生は先輩としての振る舞い方を学んでいきます。仲の良い友達同士で「いいね！」を交わし合っていると心からは、なかなかコミュニケーション力は身につけませんし、社会に出たら、自分とは異なる世代と活動しなくてはなりませんので、そうした準備にもなると考えています。

3つめの特徴は、海外へゼミ旅行に行くという点です。これまでにソウル、上海、北京、香港、台湾一周、シンガポール、マレーシア、タイなどに行きました。沖縄大学ではゼミ補助金制度が充実していて、これを利用して、卒業までに最大で4カ国も訪問できるチャンスがあります。自分とは異なる常識で生活している人たちがいるということに直に体験して、それを受け止められるようになることこそ

が、とても重要な人間的成長だと考えています。

他にも、県内でのゼミ合宿もあり、「厳しいゼミ」との評判もありますが、卒業時に「きつかったけど、良かった」と言ってもらえることを目指していて、実際に、卒業後もOB/OG会と称して、元ゼミ生達が時折集まる機会を持つていますが、このゼミの一番の自慢です。



ゼミ旅行 in 香港 (2017年3月)

リレーエッセイ
第11回

大学5年間、という選択肢

教務課 金城 慎介

突然ですが、皆さんの周りに「休学」をしている人はいますか？「2・3%」。これは日本の大学生のうち、休学している学生の割合です（文部科学省による平成24年度の統計調査より）。私は教務課という部署で、学生の身分異動に関することを担当しています。

つまり、休学とか退学とか皆さんの大学での立場が変わる時に私の出番というわけです。沖大生の「休学」をする理由は様々です。海外留学や資格取得の勉強の為だったり、個人事業を設立するから、なん

ていう学生もいます。かくいう私も、大学時代に休学して豪州へ留学していたことがありました。日本と違い、様々な人種が同じ生活圏内に混在している状況において、己の価値観はことごとく打ち砕かれ、毎日が驚きの連続でした。ある日、ホームステイ先のホストマザーに、ご飯にかけるならソースと醤油どっちが良いかを聞かれ、奇妙な質問に戸惑いながらも醤油を選んだことがありました。すると本当にご飯に醤油をかけて、私に差し出してきてたのです。きつと日本人はお米があれば何でも喜ぶ、と思っていたのでしょね。目の前で微笑むホストマザーに愛想笑いを浮かべて、心では泣きながらその醤油ご飯を胃に掻き込んだのを覚えています。（それから自分の意見を主張することの大切さを学びました。

私にとって、休学による大学生としてのプラス1年は人間的に成長できるものとなりました。大学の中では決して学べないことを多く学べたのですから。先に示した割合の



写真中央が金城さん（豪州留学当時）

数字から見ても、「休学」とは珍しい行為で、もしかするとマイナスなイメージを持つている学生もいるかもしれません。しかし、しっかりとした目標を持ち、計画が練られた前向きな休学という道は一つの選択肢として有りだと私は思います。

と、ここまで話しておいてなんですが、沖縄大学には在学したまま海外や国内の他大学で学べる海外派遣留学、国内派遣留学という制度があるんです（素敵ですね）。これを利用すれば休学をせずに留学することも可能です。ぜひ沖大生という身分をフルに活用して、充実した大学生活を送ってくださいね。

次回は、ロッククライマー、植原海里さん（教務課）です。

外国語ちゃんぷるーフェスタ開催！

2017年12月1日、国際コミュニケーション学科主催の外国語ちゃんぷるーフェスタが行われました。クリス・ブラッドリー先生、吉本霞先生、天久大輔先生が審査員をしてください、北川穂乃香さん（4年次）、平安山良樹さん（3年次）、トリパティ・スバスさん（2年

次）の中・日・英語の司会で進行しました。英語によるクリスマスソング、中国語のスピーチや歌や詩吟など、多彩なパフォーマンスで盛り上がりました。会場の飾りつけや片づけも多くの学生さんが手伝ってくれ、和気あいあいの雰囲気でした。

手に汗握る審査の結果、Gold賞は久保咲子さん（3年次、英語スピーチ）、Silver賞は武内孝夫さん（聴講生、中国語朗読）、Bronze賞は上原あかりさん（1年次、中国語朗読）、Special賞はチームカササギ（こども文化学科3年次）・上原真菜（同2年次）韓国で愛されている鳥、カササギを韓国語で紹介、歌



◆審査結果◆

- Gold 賞**：久保咲子（国際コミュニケーション学科3年次）
英語スピーチ
「大学における国際的な学習ボランティアについて」
- Silver 賞**：武内孝夫（聴講生）
中日両国語による詩の朗読
- Bronze 賞**：上原あかり（国際コミュニケーション学科1年生）
中国語による李白の詩の朗読、英語解説
- Special 賞**：チームカササギ
玉城完奈（こども文化学科3年次）・上原真菜（同2年次）
韓国で愛されている鳥、カササギを韓国語で紹介、歌

読）、Special賞はチームカササギの玉城完奈さん（こども文化学科3年次）・上原真菜さん（同2年次、韓国語による鳥の紹介と歌）。チームカササギはチマチヨゴリの衣装も鮮やかでした。



南城市役所大里庁舎で行われた学生コンペ(2017年11月4日)



地域の生活文化や歴史資源などを大切にする観光のあり方を、「南城型エコミュージアム」という形で構想している沖縄島南部の南城市。その計画づくりの中で、昨年11月に地域の特性を生かした観光スタイルを提案する学生コンペが行われた。

同コンペは、南城市の琉球開闢の歴史や尚巴志を生んだ風土



沖大チームは海沿いから丘の集落までゆつくり歩いた。海、風、鳥、虫の音

からどのような観光スタイルを築けるのか、学生目線のリサーチに学んでみようという企画。8月に公募され、集まった県内外の学生らは9つのチームとなり、それぞれが選んだ地域でキーマンと共にフィールドワークをし、全体での合宿を重ね提案内容を考えた。

本学からは法経学科成定ゼミの4人が参加。フィールドに選んだのは、サンサンビーチで有名な安座真地区。ビーチの他に観光客が訪れるスポットは特になく、人の往来はビーチからさ

「閑静×自然Ⅱアート」で南城型観光スタイルを提案

法経学科

前里桃子さん4年(南風原高校卒)、當眞嗣隆さん4年(那覇高校卒)
宇良啓太さん4年(南風原高校卒)、越智慎介さん3年(南風原高校卒)

の聴こえる静かな心地良さ、巨人伝説や幾つもの拝みの場で感じた信仰心、空き地に置かれたアート作品によって人が通い始めた空間など、土地の魅力を感じ、地域の様子を知った。

課題の発見にも努めた。丘の集落では空き家が目立つこと。昔ながらの文化や信仰が薄れつつあるのではないかとということ。背景に、海沿いの人々の動線が丘の方へ伸びていないことがあ

るのではないかと仮説を立てた。集落まで動線を延ばすにはどうしたらいいか。「閑静×自然Ⅱアート」というコンセプトで観光スタイルを考えることにした。丘の空き家にアーティストが住める仕組みをつくり、閑静な環境に潜む文化や信仰にインスピレーションを得ながら、自然の中で創作活動ができるようにしたい。アーティストと住民と観光客が交わる場をつくり、作品を地域に還元していききたい。地元の人々の考えを確認しながら、各地で試みられているアーティスト・イン・レジデンスの事例も参考にしたい。

安座真の「閑静×自然Ⅱアート」による海と丘をつなぐ観光スタイルで、人々の通い合う魅力的な地域がつけられるのではという提案となった。

(経営企画室 後藤)

共につくる授業を学ぶ

〈野生生物保護報告会「ヤンバルクイナと西表ヤマネコ」in 沖縄大学〉

沖縄県が沖縄島北部と西表島の世界自然遺産登録を目指す中、国頭村立北国小学校と竹富町立上原小学校は総合的な学習の授業で、それぞれ地元の野生動物「ヤンバルクイナ」と「西

表ヤマネコ」の生態などを調査し保護について考えてきた。それらの調査の合同報告会が2017年11月14日に沖縄大学で行われ、教師を目指す学生が子どもたちの発表を聞いた。



合同報告会を進行する北国小学校の金城明美校長と発表する児童ら(本学2号館教室)

合同報告会は、これまで北国小学校や離島の小学校などでゼミ活動してきた子どもも文化学科の梶村光郎教授の授業で行われた。北国小から5人の児童が来校し、上原小13人の児童は携帯電話を通しての参加であった。

事前に送ったそれぞれの映像を見ながら携帯電話で互いに発表し合うこの合同報告会は、島しょ地域の遠隔にある小学校同士が共に学びの場をつくる試み。一見シンプルなようでも、互いが見えない中で施す細やかな気配りを進行役の金城明美北国小学校校長が体現した。

金城校長の進行で沖大会場の場づくりから始まった。合同報告会の流れが説明され、北国の児童・引率教諭、沖大の学生・教員、報道関係者など教室の構成員全員を紹介。両小学校の紹介にはそれぞれのウェブサイトをスクリーンに映し、北国の児童に西表島を地図上で指示してもらった場面では、「3年生が西表島を予想します。低学年はもつと遠くからでないかと全体が見えないです」と児童に適した立ち位置を説明。「いまのような一問一答式もたまにしますが、あまりやりません。いろんな選択肢を用意して、間違っても、なるほど君はそう考えるのかとOKを出してあげて

ほしいのです」と解説。続けて、答えのない質問を出し、それに答える児童に、なぜそのように考えるのかを聞いてからOKを出して見せた。

両会場が携帯電話でつながると、上原小に沖大会場の状況が伝えられた。「いまですね、周りには大学生が約30名と先生方もいます。NHKさんと沖縄タイムスさんと沖縄大学の広報の方が入っています。北国小学校の子どもたちも準備ができています」「それではさっそく報告会を始めたいと思います。まず、北国小学校が『ヤンバルクイナを見つけよう』という題で報告をします。聞いてください。そうして児童にマイクが渡された。

双方の発表が済むと、「大学生の皆さんは一生懸命メモをしながら真剣にうなずいていました。画面には西表ヤマネコを映していますが、これからのいろんな質問が来ると思います。そこらは何人くらいいますか？何年生ですか？4年生が13名来てくれています。さっそく質問を聞いてみたいと思います」と状況を共有すると、児童同士の活発な質疑応答が始まった。

最後に梶村教授より、児童の発表内容についてのコメントに加えて、「これから新しい学習指導要領が変わっていきます。

アクティブラーニングという主体的・対話的に深く学習する、そういう学びをこれからつくろうとしています。今日の2校のやり取り、それから大学生が加わってのやり取りはまさにそういう学習で、学生もいろいろと勉強させられたのではないかと思います」と講師が述べられました。また、子ども文化学科4年の渡口采可さんは、「西表との電話で、小学生同士が自分たちで考えて質疑応答を進めるように持つていく進行のやり方が勉強になりました」「卒業後は国頭地区の小学校で働くので、今日の経験を活かして子どもたちと一緒に学んでいけるような教師になればと思います」と感想を語った。(経営企画室 後藤)



「アスリート工房と」地域交流プロジェクト」 協定を締結

沖繩大学と一般社団法人アスリート工房（譜久里武代表）は、スポーツ交流事業として「沖繩大学・アスリート工房提携型健康・スポーツ地域活性化プロジェクト」を実施することとなりました。

実施にあたり、2017年11月29日に沖繩大学アネックス共創館にて、協定書の調印式及び共同記者会見を行いました。

譜久里代表挨拶

「昨今、沖繩県の健康問題が叫ばれる中、県民の健康運動に対する意識の向上と、ス



ポーツの習慣化を目指し活動を行っていく中で、沖繩大学と提携することにより、沖繩大学の教育研究に関する知的、物的資源と、すでに県内7拠点で地域スポーツクラブの指導を展開するアスリート工房の人的資源を融合することで、スポーツ交流を通しながら健康増進を図るといふ新しい地域活性化を行っていきたいと考えています。特に、アスリート工房の指導ノウハウを、共に事業に参加する学生へ伝え行く中で、彼らの「実践力」を高められたらと思います。」

仲地学長挨拶

「本学は、「地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる、開かれた大学」を理念に、これまで教育・研究活動を行っており、2008年の50周年を節目に「地域共創・未来共創の大学へ」と新たなかじ取りを行った現在も、地域に寄り添う大学の姿は変わっておりません。また、本学には福祉文化学科に健康スポーツ福祉専攻があり、更に2019年には管理栄養士を養成する健康栄養学部設置を構想中であります。この健康と栄養の両輪にアスリート工房の「実践力」が加わることで、「健康・栄養・スポーツ」というテーマで、より充実した教育研究活動を行えると考えております。」

事業内容は、2018年1月より地域の子どもたちを対象に、週2回のジュニアスポーツプリントコースを月謝制で開催し、球技系のスポーツプリントコースや運動能力克服コース等、徐々に内容を拡充させていきます。今回の提携をきっかけとして、本学とアスリート工房がより綿密に連携し、地域に根付いたプロジェクトを行ってまいりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

関東学院大学と交流協定締結、人事交流をおえて



学生相互派遣の学部	
沖繩大学	法経学部、人文学部
関東学院大学	国際文化学部、社会学部、経済学部、経営学部、法学部、人間共生学部、教育学部

2016年度、神奈川県横浜市にある関東学院大学より、本学と単位互換提携を結ぶたいという申し入れがあり、2017年6月16日に、関東学院大学の規矩学長をはじめとする皆様をお迎えして、「沖繩大学と関東学院大学における大学間交流に関する協定書」を締結した。

この協定においては、学生の相互派遣の他に、これまでの他大学との交換協定にはなかった職員の相互派遣が含まれている。第1回目の学生派遣にあたる2018年度は、本学から関東学院大学に1名を派遣し、関東学院大学からは5名の学生を受け入れる予定である。

2017年8月30日〜9月1日に、学生の派遣に先立って職員の相互派遣協定に基づき、私を含めた本学職員3人で関東学院大学を訪問した。先方からは、まさに「熱烈歓迎」という言葉があてはまるような大歓迎を受けた。

今回の訪問は、人事交流を目的としていたため、お互いの人事・給与制度や非常勤教職員の雇用状況、科研費への取り組み、関東学院大学における栄養学部の設置申請時の状況の説明、サテライトキャンパスを含む広大なキャンパスの見学を行った。これに加えて懇親会も開いていたのだが、滞在中にお会いした各部署の全員が懇親会に出席して下さった事に一番感激した。

関東学院大学は、11の学部部に1万人超が学ぶ総合大学であるが、このような温かい交流がすでに職員同士で始まっている。沖繩大学の学生は、この居心地の良い沖繩大学を気に入っていると思うが、一度このキャンパスを飛び出して、他大学の学生との交流を深めていただきたい！

（教務課長 安里賢吾）



保護者懇談会では、学生一人ひとりを支援するために、保護者と教職員が直接面談し、学生の修学状況や課外活動、家庭での過ごし方等、お互い普段目にすることができない情報を伝え、意見交換を行う場となっています。

2017年度は、久米島地区(8月31日)、宮古地区(9月6日)、八重山地区(9月7日)、北部地区(9月12日)、中南部



地区(9月16日)の5地区で実施しました。

例年、各地区とも学外の会場で実施しているのですが、今回は中南部地区を沖縄大学構内で実施し、保護者からは「普段足を運ぶ機会がないので大学の様子が見られて良かった」、「大学での面談はリラックスできた」等の意見があり大変好評でした。

後援会、同窓会及び大学関係者の皆様には、保護者懇談会にご尽力を賜り感謝申し上げます。来年度もより良い学生支援のため、保護者懇談会へのご協力をよろしく願います。

(学生支援課 比嘉)

沖縄大学創立60周年記念事業資金のための募金活動状況

沖縄大学は2018年6月10日に創立60周年の節目を迎えます。その記念事業として、学生食堂の新設、アクティブ・ラーニングの為に教室やグラウンドの整備を進めており、高等教育を担う学校法人として、同窓生、一般の皆様、並びに企業、法人様より、随時募金の受付を行っております(5千万円を目標に寄附金を募ります)。本記念事業に係る募金活動は2019年3月まで予定しておりますので、特段のご芳情を賜りますようお願い申し上げます。

2017年8月11日から2017年12月15日までのご寄附企業名 及び ご芳名(敬称略・順不同)

金額単位:円

■企業・法人・団体		中央産業㈱ 代表取締役	■後援会(在学生の保護者等)		仲本	将成	10,000	屋嘉部 久徳	100,000
ご芳名	金額	知念 秀康	30,000	ご芳名	金額	屋比久	5,000	金城 祐子	
株サンエー 代表取締役社長		海邦邦総研 代表取締役専務		福原 千秋	10,000	宇久田 朝仁	20,000	匿名希望者(15名)	155,000
上地 哲誠	1,000,000	玉城 秀一	30,000	翁長 和彦	5,000	當真 嗣朗	10,000		
沖縄ビル管理㈱ 代表取締役		海銀リース㈱ 代表取締役社長		金折 裕司	10,000	親泊 徹徳	5,000	■一般篤志家	
新垣 淑典	1,000,000	大濱 薫	30,000	鈴木 智恵子	5,000	大城 眞	50,000	ご芳名	金額
沖縄セルラー電話㈱ 代表取締役社長		イオン琉球㈱ 代表取締役社長		島袋 正和	10,000	垣花 栄	5,000	島尻 香雄	10,000
湯浅 英雄	200,000	佐方 圭二	30,000	當真 樹	5,000	波照間 用展	10,000		
嘉数胃腸科外科医院 院長		榑拓琉金属 代表取締役社長		知念 弘秀	5,000	屋富祖 繁幸	10,000	■本学教職員・学生	
嘉数 昇康	100,000	古波津 清正	30,000	宮國 修		久高 節子	5,000	ご芳名	金額
沖縄協同ガス㈱ 代表取締役社長		福山商事㈱ 代表取締役社長		宮里 文隆		屋良 良幸	30,000	加藤 彰彦	100,000
東仲 盛潤	50,000	福山 保	30,000	匿名希望者(11名)	65,000	平良 良裕	5,000	真栄里 泰山	100,000
リウボウグループ	50,000	㈱人材派遣センターオキナワ 代表取締役社長		■同窓会関係者		海野 高志	30,000	津波古 敏子	30,000
㈱ホクガン 代表取締役社長		西 泰郎	10,000	ご芳名	金額	毛利 雄	10,000	谷口 正厚	10,000
大仲 裕治	50,000	沖縄大学後援会	4,400,000	上間 昭	5,000	齋藤 登	10,000	苗代 暖(学生)	5,000
㈱イーブングッド52 代表取締役				高良 弘明	10,000	金武 幸	5,000	本学教職員(62名)	863,000
平良 勝也	50,000					糸数 元	30,000	匿名希望者(3名)	160,000

総額 13,051,400円 総額については、2017年4月3日からの積算募金額です。

本件掲載分につきましては、広報誌への掲載をご了承いただきました企業名・ご芳名を報告させていただきます。この度のご寄附に重ねて感謝申し上げますとともに、頂戴いたしました寄附金につきましては、本記念事業の趣旨に沿うよう有効に活用させていただく所存でございます。



「地域共創・未来共創の大学へ」

沖縄の次代を担う若者たちのために、
創立60周年記念事業の趣旨と内容にご理解を頂き、
募金へのご支援、ご協力を賜りますよう、
心よりお願い申し上げます。

2017年度

教員採用試験現役生14名、 過卒者を含め38名合格

今年も沖縄県をはじめ全国の公立学校教員候補者選考試験が終了し、過去最多となる現役生14名（国際コミュニケーション学科1名、こども文化学科13名）が合格しました。過卒者を含めると38名の合格者となります。

近年、本学出身の合格者数は増加しており、13年度9名（現役6名、過卒3名）、14年度15名（現役8名、過卒7名）、15年度28名（現役8名、過卒20名）、16年度36名（現役8名、過卒28名）となっています。

現時点で把握している合格者数をお知らせいたします。

【国際コミュニケーション学科】

現役生1名

〈中学校英語〉

中村志穂（那覇高校卒）

【こども文化学科】現役生13名

〈小学校〉

石原唯花（那覇高校卒）、上地翔太（知念高校卒）、上原由紀（向陽高校卒）、大城花奈（那覇国際高校卒）、神山彩和子（那覇国際高校卒）、勢理客ゆか（宜野座高校卒）、玉寄友梨（鹿児島玉龍高校卒）、知念浩史（球陽高校卒）、渡口采可（北山高校卒）、野原華子（糸満高校卒）、花城彩（普天間高校卒）、宮城千奈（浦添高校卒）、宮城舞子（首里高校卒）

※卒業生からも「合格」のお知らせが届いています。（2017年12月時点）

〈小学校〉

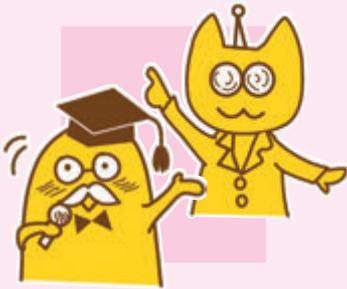
18名（沖縄県）

〈中学校〉

社会3名（沖縄県）
英語1名（埼玉県）
保健体育1名（東京都）

〈高等学校〉

福祉1名（沖縄県）



健康栄養学部管理栄養学科を新設！

（設置構想中）

新学科設置準備室 森田 泰弘

かつては長寿県として知られた我が沖縄ですが、最近の報道では平均寿命は全国46位と、完全に短命県に転落しています。そのような状況を鑑み、沖縄県は2040年を目標に「平均寿命日本一を目指す」ことを宣言し（健康おきなわ21）、県民の健康づくり運動を推進しています。

沖縄大学は、県の計画に呼応し、『食』や『栄養』の分野から人々の健康の向上に貢献できる人材を育成するため、2019年4月に、管理栄養士を養成する『健康栄養学部 管理栄養学科（仮称）』の開設を目指し、文部科学省への新学部設置の認可申請作業を進めているところで

す。管理栄養士は、病院や学校をはじめ、企業の商品開発やスポーツ分野での栄養指導など、近年ますます活躍のフィールドが広がっている資格です。

現在、沖縄県には管理栄養士養成校は1校もなく、管理栄養士・栄養士・栄養教諭の養成が、全国で最も立ち遅れている地域です。そのため、管理栄養士の資格取得を目指す生徒は、県外大学へ進学するしかなく、経済的

理由で進路を変更せざるを得ない生徒も少なくないようです。県内に管理栄養士養成校があれば、保護者の経済的・精神的負担を軽減し、生徒の夢実現に手を貸すことが可能となります。

また合わせて、全国的に見ても低い水準にある沖縄県の大学進学率の向上を図ることが出来ます。今回の管理栄養士養成学部の設置は、沖縄県が目指す「長寿県沖縄の復活」に寄与するものとなり得ます。また、それは本学の理念である「地域共創・未来共創の大学へ」向け、さらに歩を進めることでもありと確信しています。

縁があつて沖縄大学での広報誌の仕事に携わることができ、新たにやってみたいことも見えてきたところで、今年こそは、学生の頃のようにバラエティに富んだ時間をすごそうではないかと、ここに決意表明させていただきます。

明けましておめでとうござい
ます。皆様にとって、昨年ほどの
ような1年でしたか？
社会人になってからは突風の
ごとく時間が過ぎていくと感じ
ています。学生の頃は、山積みの
課題とアルバイトや娯楽にかけ
る時間のやりくりがものすごく
上手だったはずなのに、社会人の
今はというと、時間の使い方が単
調だったかと1年の終わりに反
省することが年中行事となつて
きました（笑）
内地（本土）での社会人生活に
区切りをつけ、大好きな地元沖縄
に帰ってきてあつという間に1年
が過ぎてしまいました。単調だ
った日々には吸い取られた体力と
気力と好奇心を取り戻すには十
分な時間が過こせたと感じます。
縁があつて沖縄大学でのこの広
報誌の仕事に携わることができ
新たにやってみたいことも見え
てきたところで、今年こそは、学
生の頃のようにバラエティに富
んだ時間をすごそうではないかと、
ここに決意表明させていただきます。
皆様にとって、2018年が、
昨年よりもさらに実り多き1年
になりますように！

（富盛）

編集後記